

【晉紀十二】 起強圉赤奮若，盡著雍攝提格，凡二年。

■東晋、▲慕容氏、続国訳漢文大成. 経子史部 第 5 卷 292p

中宗元皇帝上建武元年（丁丑，317年）

（元帝、諱は睿、字は景文、宣帝の曾孫、琅邪の武王伉の孫、恭王僅觀の子）

漢春，正月，漢兵は東に弘農を略し，太守の**宋哲**（華陰に屯す）は江東に奔る。

前涼 **〔張寔への詔を受けず〕** 黃門郎の**史淑**、侍御史の**王冲**は長安より涼州に奔り，稱すに、

「**愍帝**は出でて降る前一日，**淑**等をして詔を繼^{もたら}して**張寔**（實は×）に賜わ使め，**寔**を拜して大都督、涼州牧、侍中、司空とし，製を拜し事を行わしむ」

と，且つ曰く、

「朕は已に琅邪王に詔して時に大位を攝せしめ，君は其れ琅邪に協贊して，共に多難を濟^{すく}え。」

淑等は姑臧（甘肅省甘涼道武威県、現・武威市）に至り，**寔**は大いに臨（哭）すること三日，官を辭して受けず。

前涼 **〔前涼の長安救援軍の失敗〕** 初め，**寔**の叔父の**肅**は西海（漢の獻帝興平二年に武威太守張賀は請いて西海郡を置き、張掖の居延県を分けて之に属す。甘肅省酒泉邊外外蒙古額濟納旗、現・額濟納旗）太守と為り，長安の危逼を聞き，先鋒と為りて入援せんと請う。（5-293p）**寔**は其の老を以て，許さず。長安の守らざるを聞くに及び，**肅**は悲憤して而して卒す。

寔は太府（張氏は既に河西に自立して都督府を太府、涼州府を少府とす）司馬の**韓璞**、撫戎將軍（張氏の官）の**張閭**等を遣わして歩騎一萬を帥いて東に漢を撃たしめ，討虜將軍の**陳安**、安故（張氏が金城・西平二郡を分けて置く郡）太守の**賈騫**^{かけん}、隴西太守の**吳紹**に命じて各々郡兵を統べて前驅と為さしむ。又た相國の**保**^みに書を遣わして曰く、
「王室に事有り，軀を投じるを忘れず。前に**賈騫**を遣わし公の舉動を瞻しめ，中ごろ符命（保の符は寔に下る）を被り，**騫**に敕して軍を還さしむ。俄に聞く寇は長安に逼り，**胡崧**は進まず，**麴允**は金五百を持し，救いを**崧**に請い，遂に決して**騫**等を遣わして進軍して嶺を度らしむ（涼州より黄河を渡り皋蘭県の沃干嶺を渡り狄道に至る）。會々朝廷の傾覆すると聞き，忠を為すこと遂げず，憤痛之深きこと，死して餘責有り。今更に**璞**等を遣わして，唯だ公の命に是れ従う。」

と、**璞**等は卒に進む能わず而して還り，南安（甘肅省蘭山道隴西県の東北、現・定西市隴西県）に至り，諸羌は路を斷ち，相い持ちて百餘日，糧は竭き矢は盡きる。**璞**は車中の牛を殺し以て士を饗して，泣いて之に謂って曰く、「汝が**曹**^{ともがら}は父母を念う乎？」
曰く、「念う。」「妻子を念う乎？」
曰く、「念う。」「生きて還るを欲する乎？」
曰く、「欲す。」「我が令に従う乎？」
曰く、「諾。」

乃ち鼓噪して進みて戦う。會々**張閭**は金城の兵を帥いて繼いで至り，夾撃し，大いに之を破り，斬首は數千級。

漢 **〔長安埋没し、涼州のみ安全〕** 是より先，長安の謠いに曰く、

「秦川の中に，血は腕を没し，唯だ涼州のみ有りて柱に倚りて觀る。」

漢兵の關中を覆うに及び，氐、羌は隴右を掠め，雍、秦之民は，死する者は什に八九，涼州は獨り安全な

り。

漢 **〔滎陽の李矩は偽降して劉聰軍を破る〕** 二月，漢主の聰は従弟の暢をして歩騎三萬を帥いて滎陽を攻め使め，太守の李矩（新鄭に屯す）は韓王の故壘に屯し，相い去ること七里，遣使して矩を招く。時に暢の兵は猝に至り，矩は未だ備えを為すに及ばず，乃ち遣使して詐りに暢に降る。暢は復た備えを設けず，大いに饗し，渠帥は皆な酔う。矩は夜之を襲わんと欲し，士卒は皆な恒懼し，矩は乃ち其の將の郭誦を遣わして子産の祠（子産は鄭の相たりて、鄭人はその恵みを懷いてこれが為に祠を建てる）に禱り，巫をして揚言せ使めて曰く、

「子産に教え有り，當に神兵を遣わして相い助けんと。」

衆は皆な踴躍して争いて進む。矩は勇敢なる千人を選び，誦をして之を將い使め，暢の營を掩撃し，斬首は數千級，暢は僅かに身を以て免かれる。

【司馬睿の即位、東晋成立】

■ **〔愍帝の詔を受けると称し司馬睿即位〕** 辛巳（1日），宋哲は建康（元秣陵郡、孫權は建業とし、武帝は呉を平らげて秣陵とする。太康三年、秣陵の水北を分けて建康とする。愍帝即位し、帝の諱を避けて建康に改名、今の南京）に至り，愍帝の詔を受けると稱し，丞相の琅邪王の睿をして萬機を統攝せ令む。三月，琅邪王は素服して出でて次り（正寢を避ける、自肅），哀を舉げること三日。是に於いて西陽王の業（汝南王亮の子）及び官屬等は共に尊號を上り，王は許さず。業等は固く請いて已まず，王は慨然として流涕して曰く、

「孤は，罪人也。（5-294p）諸賢は逼ら見ること已まざれば，當に琅邪に歸るべき耳！」

私奴（個人的使用人、奴婢ではない）を呼びて，駕に命じて將に國に歸らんとする。業等は乃ち魏、晋の故事に依りて，晉王と稱せんと請う。之を許す。辛卯（9日），晉王に即位し，大赦し，改元する。始めて百官を備え，宗廟を立て，社稷を建てる。

■ **〔司馬睿の政治体制〕** 有司は太子を立てんと請い，王は次子の宣城公の衷を愛し，之を立てんと欲し，王導に謂って曰く、

「子を立てるは當に徳を以てすべし。」

導は曰く、

「世子、宣城は，俱に朗俊之美有り，而して世子は年長なり。」

王は之に従う。丙辰（34日?），世子の紹を立てて王太子と為す。衷を封じて琅邪王と為し，恭王の後（続は後、帝は太宗に後たりて故に衷を以て琅邪國の祀）を奉ぜしむ。仍って衷を以て青、徐、兗三州の諸軍事を都督し，廣陵に鎮せしむ。西陽王の業を以て太保と為す，譙の剛王の遜之子の承を封じて譙王と為す。遜は，宣帝之弟の子也。又た征南大將軍の王敦を以て大將軍、江州牧と為し，揚州刺史の王導を驍騎將軍、都督中外諸軍事と為し，中書監を領し，尚書事を錄さしめ，丞相の左長史の刁協を尚書左僕射と為し，右長史の周顗を吏部尚書と為し，軍諮祭酒の賀循を中書令と為し，右司馬の戴淵、王邃を尚書と為し，司直の劉隗を御史中丞と為し，行參軍の劉超を中書舍人（奏案起草）と為し，參軍事の孔愉を長兼（初めての官）中書郎とする。自餘の參軍は悉く奉車（乘輿車を御すを掌る）都尉を拜し，掾屬は駙馬都尉（副馬を掌る）を拜し，行參軍舍人は騎都尉（羽林騎を監するを掌る）を拜す。王敦は州牧を辭し，王導は敦を以て六州を統べしめ，中外都督を辭す。賀循は老病を以て中書令を辭す。王は皆な之を許し，循を以て太常と為す。是の時，喪亂之後を承け，江東は草創す。刁協は久しく中朝に宦たりて，舊事を諳練（暗記練達）し，賀循は世の儒宗為り，禮學に明習し，凡そ疑議有れば，皆な決を焉に取る。

■ 【劉琨、段匹磾の同盟は晉室翼載】 劉琨、段匹磾は相い與に血を敵^{すす}りて同盟し、期するに晉室を翼載するを以てす。辛丑（19日）、琨は華、夷に檄告し、兼左長史、右司馬の溫嶠を遣わし、匹磾は左長史の榮邵を遣わして、表及び盟文を奉じて建康に詣りて勸進す。嶠は、羨（溫羨は86卷惠帝永興二年の見える）之弟の子也。嶠之從母（母の姉妹）は琨の妻と為り、琨は嶠に謂って曰く、

「晉の祚は衰えたりと雖も、天命は未だ改まらず、吾は當に功を河朔に立て、卿をして譽を江南に延べ使むべし。行け矣、之に勉めよ！」

■▲ 【慕容廆は晉室を支持】 王（晉王）は鮮卑の大都督の慕容廆を以て都督遼左（遼東）雜夷（中国ら遼東への）流民諸軍事、龍驤將軍、大單于、昌黎公と為し、廆は受けず。征虜將軍の魯昌は廆を説いて曰く、

「今兩京（洛陽・長安）は覆没し、天子は蒙塵し、琅邪王は製を江東に承け、四海の繫屬する所と為る。明公は一方に雄據すると雖も、而して諸部は猶ほ兵を阻みて未だ服せざる者、蓋し官は王命に非ざるを以ての故也。謂うに宜しく使いを琅邪に通じ、大統を承けるを勧め、然る後に詔令を奉じて以て罪有るを伐てば、誰か敢えて従わざらん！」（単に受けず、晉王に大統を承けるを勸進）

處士の遼東の高詡は曰く、

「霸王之資は、（5-295p）義に非ざれば濟さず。今晉室は微と雖も、人心は猶ほ之に附く、宜しく江東に使いを遣わして、尊ぶ所有りを示し、然る後に大義に仗りて以て諸部を征すれば、辭無きを患えず矣。」廆は之に従う、長史の王濟を遣わして海に浮かびて建康に詣りて勸進せしむ。（新しく勃興した慕容氏・苻氏・姚氏は皆晉室を支持して自らの地位を高めようとした）

【劉粲皇太子への陰謀】

漢 【劉粲の陰謀で劉乂を追い落とし】 漢の相國の粲は其の黨の王平をして太弟の乂（^{がい}続は又、義は?）に謂って曰わ使む、

「適々中詔を奉じ、京師は將に變有らんと雲い、宜しく衷甲（衣服の下に鎧す）して以て非常に備えるべし。」乂は之を信じ、宮臣に命じて皆な衷甲して以て居らしむ。粲は馳せて遣わして斬准、王沈に告げしむ。准は以て漢主の聰に白して曰く、

「太弟は將に亂を為さんとする、已に衷甲せり矣！」

聰は大いに驚いて曰く、

「寧んぞ是れ有らん邪！」

王沈等は皆な曰く、

「臣等は之を聞くこと久しく矣、屢々之を言う、而るに陛下は之を信じず也。」

聰は粲をして兵を以て東宮を圍ま使む。粲は准、沈をして氐、羌の酋長十餘人（乂は大單于となり氐羌を統率）を收め使め、之を窮問し、皆な首を高格（高い柵）に懸け、鐵を燒きて目を灼き、酋長は自ら乂と謀反すると誣いる。聰は沈等に謂って曰く、

「吾は今而して後に卿等之忠を知る也！當に知れば言わざる無きを念い、往日言いて而して用いざるを恨む勿かれ也！」

是に於いて東宮（劉乂の居る）の官屬及び素より親厚する所、准、沈等の素より憎怨する所の者の大臣數十人を誅し、士卒（東宮の四衛の兵）萬五千餘人を坑す。夏、四月、乂を廢して北部王（匈奴後部、新興に居る、北海王は?）と為し、粲は尋いで准をして之を賊殺せ使む。乂は形神秀爽にして、寛仁に器度有り、故に士心は多く之に附く。聰は其の死を聞き、之を哭して慟して、曰く、

「吾が兄弟は止だ二人（この時、劉淵の子は聰と乂のみ残る）を餘し而して相い容れず、安んぞ天下をして吾が心
を知ら使むを得る邪！」

氏、羌の叛する者は甚だ衆く、**靳准**を以て車騎大將軍を行わしめ、討ちて之を平らぐ。

■**五月**，壬午（1日），日食之れ有り。

■**「溫嶠は建康着、才気で人気」****六月**，丙寅（5日），**溫嶠**等は建康に至り，**王導**、**周顗**、**庾亮**等は皆な
嶠の才を愛し、争いて之と交わる。是の時，太尉、豫州牧の**荀組**、冀州刺史の**邵續**、青州刺史の**曹嶷**、寧
州刺史の**王遜**、東夷校尉の**崔毖**等は皆な上表して（皇帝即位を）勸進す，**王**は許さず。

■**「祖逖は塢主の攻略に力を込める」**初め，流民の**張平**、**樊雅**は各々衆數千人を聚めて譙に在り，塢主と
為る。王之丞相と為る也，行參軍の譙國の**桓宣**を遣わして往きて**平**、**雅**を説かしめ，**平**、**雅**は皆な降を請
う。豫州刺史の**祖逖**の出でて蘆洲に屯するに及び，參軍の**殷義**（続は殷乂）を遣わして**平**、**雅**に詣る。**義**は
意には**平**を輕んじ，其の屋を視，曰く、
「**馬廐**と作す可し。」

大鑊（足の無い鼎）を見て，曰く、

「鐵器を鑄る可し。」

平は曰く、

「此れ乃ち帝王の鑊なり，天下清平ならば方に之を用い，奈何して之を毀かん！」

義は曰く、

「卿は未だ能く其の頭を保たず，而して鑊を愛する邪！」

平は大いに怒り，（5-296p）坐に於いて**義**を斬り，兵を勒して固く守る。**逖**は之を攻め，歲餘りにして下
らず，乃ち其の部將の**謝浮**を誘いて，之を殺さ使む。**逖**は進みて太丘（県、河南省開封道永城県、現・商丘市永城
市）に據る。**樊雅**は猶ほ譙城に據り，**逖**と相い拒む。**逖**は之を攻めて克たず，兵を南中郎將の**王含**に請う。
桓宣は時に**含**の參軍為り，**含**は**宣**を遣わして兵五百を將して**逖**を助けしむ。**逖**は**宣**に謂って曰く、

「卿の信義は已に彼に著れる，今復た我が為に**雅**に説け。」

宣は乃ち單馬にて兩人を從えて**雅**に詣りて曰く、

「**祖豫州**は方に**劉**、**石**を平蕩し，卿に倚りて援を為さんと欲す。前に**殷義**の輕薄なるは，豫州の意に非ざ
る也。」

雅は即ち**逖**に詣りて降る。**逖**は既に譙城に入り，**石勒**は**石虎**を遣わして譙を圍ましむ。**王含**は復た**桓宣**
を遣わして之を救わしめ，**虎**は解いて去る。**逖**は表して**宣**を譙國內史と為す。

■**「晉は大旱・蝗・洪水」**己巳（18日），**晉王**は檄を天下に傳えて，稱す、

「**石虎**は敢えて犬羊（胡賊）を帥い，渡河して毒を縦にす。今琅邪王の**裒**等の九軍，銳卒三萬を遣わして，
水陸四道より，逕ちに賊場に造りて，**祖逖**の節度を受けしむ。」

尋いで復た**裒**を召して建康に還らしむ。**秋**，**七月**，大旱す。司、冀、並、青、雍州は大いに蝗す。河（黄
河）、汾（汾水）は溢れ，千餘家を漂わす。

漢主の**聰**は**晉王**の**祭**を立てて皇太子と為し，相國、大單于を領し，朝政を總攝するは故の如し。大赦
す。

■**「段匹磾らの内部不統一で石勒討てず」****段匹磾**は**劉琨**を推して大都督と為し，其の兄の遼西公の**疾陸
眷**及び叔父の**涉復辰**、弟の**末杯**等に檄して固安（直隸省保定道易県、現・保定市易県）に會し，共に**石勒**を討たし
む。**末杯**は**疾陸眷**、**涉復辰**に説いて曰く、

「父兄を以て而して子弟に従うは、恥也。且つ幸いにも而して功有りとも、**匹磾**は獨り之を收め、吾がともがら屬は何か有らん哉！」

各々兵を引いて還る。**琨**、**匹磾**は獨り留まる能わず、亦た薊に還る。

■**荀組**を以て司徒と為す。

【猾賊の杜曾に周訪は勝つ】

漢八月，漢の**趙固**は衛將軍の**華薈**を臨潁（潁川郡の県、河南省開封道臨潁県、現・漯河市臨潁県）に襲い、之を殺す。

漢■「**趙固は周振を斬り李矩に附く**」初め、**趙固**は長史の**周振**と隙有り、**振**は密かに固を漢主の**聰**に譖る。**李矩**之**劉暢**を破る也（今年の二月）、帳中に於いて**聰**の詔を得たるに、

「暢をして既に**矩**に克てば、還りて洛陽を過ぎ、**固**を収めて之を斬り、**振**を以て**固**に代わら令めん」とす。**矩**は（その詔を）送りて以て**固**に示す。**固**は**振**の父子を斬り、騎一千を帥いて來降す。**矩**は復た**固**をして洛陽を守ら令む。

■「**鄭攀は王廙らに降伏、杜曾の奇妙な動き**」**鄭攀**等は相い與に**王廙**（276-322、本貫は琅邪郡臨沂県。王羲之の叔父）を拒み、衆心は壹ならず、散りて横桑口（湖北省江漢道旧漢陽府内、現・武漢市蔡甸区）に還り、**杜曾**（～319、流民勢力、新野、沔水・漢水の地に割拠）を入れんと欲す。**王敦**は武昌太守の**趙誘**、襄陽太守の**朱軌**を遣わして之を撃ち、**攀**等は懼れ、降を請う。**杜曾**も亦た**第五猗**を襄陽に撃ち以て自ら贖あがなわんと請う。

■「**朱伺は杜曾の動きを読むも遂に死す**」**廙**は將に荊州に赴かんとし、長史の**劉浚**を留めて揚口（統は楊口、楊水の口、湖北省襄陽道天門県の西南、現・天門市）の壘に鎮ぜしむ。竟陵内史の**朱伺**は**廙**に謂って曰く、

「**曾**は、猾賊（悪賢い賊徒）也、外に屈服を示し、官軍を誘いて西せ使め、然る後に道を兼ねて揚口を襲わんと欲する耳。（5-297p）宜しく大いに部分（兵の部署を決めて迎撃態勢）すべし、未だ便ち西す可からず。」

廙は性は矜厲（慎み深くて威厳あり）にして自ら用い、**伺**を以て老怯と為し、遂に西に行く。**曾**等は果たして還りて揚口に趨く。**廙**は乃ち**伺**を遣りて歸らしめ、裁かに壘に至れば、即ち**曾**の圍む所と為る。**劉浚**は自ら北門を守り、**伺**をして南門を守ら使む。**馬俊**（統は馬嵩、元は**鄭攀**と同じく**王廙**を防ぐ）は**曾**に従いて來たりて壘を攻め、**俊**（馬俊）の妻子は先に壘中に在り、或は其の面を皮はぎて以て之に示さんと欲す。**伺**は曰う、

「其の妻子を殺すとも、未だ圍を解く能わず、但だ益々其の怒れる耳。」乃ち止む。**曾**は攻めて北門を陥とし、**伺**は傷を被り、退きて船に入り、船底を開きて以て出で、沉行（潜水）すること五十歩、乃ち免かるを得る。**曾**は人を遣わして**伺**を説いて曰く、

「**馬俊**は卿が其の妻子を全くするを徳とし、今盡く卿の家内外百口を以て**俊**に付す、**俊**は已に心を盡くして收め視る、卿は來たる可き也。」

伺は報じて曰く、

「吾が年は六十餘なり、復た卿と賊を作す能わず、吾死して亦た當に南に歸るべし、妻子は汝に付して之を裁せしむ。」

乃ち**王廙**に甌山（湖北省江漢道漢川県の東南、現・孝感市漢川市）に就き、創を病み而して卒す。

■「**周訪は軍よく統率し杜曾を沌陽に破る**」戊寅（28日）、**趙誘**、**朱軌**及び陵江將軍の**黃峻**は**曾**と女觀湖に戦い、**誘**等は皆な敗死す。**曾**は勝ちに乗りて徑ちに沔口いたに造（告は×）り、威は江、沔を震わす。**王**は豫章太守の**周訪**をして之を撃た使む。**訪**は衆八千有り、進みて沌陽（湖北省江漢道漢陽県、現・武漢市蔡甸区）に至る。**曾**は銳氣甚だ盛んにして、**訪**は將軍の**李恆**をして左甄けん（左翼）を督し、**許朝**をして右甄（右翼）を督せ使め、**訪**は自ら中軍を領す。**曾**は先ず左、右甄を攻め、**訪**は陣後に於いて雉を射て以て衆心を安んじ、其の

衆に令して曰く、

「一甄は敗れば、三鼓を鳴らさん。兩甄が敗れば、六鼓を鳴らさん。」

趙誘の子の胤は、父の餘兵を將いて左甄に屬し、力戦し、敗れ而して復た合し、馬を馳せて訪に告げる。訪は怒り、叱して更に進ま令め、胤は號哭して還り戦う。旦より申に至り、兩甄は皆な敗れる。訪は精銳八百人を選びて、自ら酒を行いて之を飲ませ、敕す、

「妄りに動くを得ず、鼓の音を聞けば乃ち進め。」

曾の兵は未だ至らざること三十歩にして、訪は親ら鼓を鳴らし、將士は皆な騰躍して奔り赴き、曾は遂に大いに潰え、千餘人を殺す。訪は夜之を追ひ、諸將は明くる日を待つを請ひ、訪は曰く、

「曾は驍勇にして能く戦ひ、向者に彼は勞し我は逸せり、故に之に克つ。宜しく其の衰えたるに及びて之に乗れば、滅す可き也。」

乃ち鼓行し而して進み、遂に漢、沔を定める。曾は走りて武當（順陽郡の県、湖北省襄陽道均県、現・十堰市丹江口市）を保つ。王眞は始めて荊州に至るを得る。訪は功を以て梁州刺史に遷り、襄陽（胡子序が敗れて梁州は陥没し、故に周訪には襄陽に屯せしむ）に屯す。

■冬、十月、丁未（29日）、琅邪王の褒は薨ず。十一月、己酉（1日）朔、日食之れ有り。

■丁卯（19日）、劉琨を以て待中、太尉と為す。

■〔晉王は太學を立てる〕 征南軍司の戴邈は上疏して、以て為す、

「喪亂以來、庠序（学校）は隳廢（^{きは}壊れ廢す）す。議者の或は謂うに、平世には文を尚（^{たつと}）び、(5-298p) 遭亂には武を尚ぶ、此の言は之に似れども、而して實に然らず。夫れ儒道は奥は深く、倉猝に而して成る可からず。天下の平泰なるに比（^{およ}）べて、然る後に之を修めれば、則ち廢墜して已に久しき矣。又た、貴游之子は、未だ必ずしも將を斬り旗を攀（^{かか}）ぎ取る之才、從軍征戍之役有らず、盛年に及びて之をして道義を講肄（^{まこと}）（講習）せしめざるは、良に惜しむ可き也。世の道は久しく喪われ、禮俗は日々に弊れ、猶ほ火之膏（^{あぶら}）を消すがごとく、之を覺る莫き也。今王業は肇（^{はじめ}）て建ち、萬物は權輿（始まる）す、謂うに宜しく道を篤くして儒を崇（^{たつと}）び、以て風化を勵（^{はげ}）ますべし。」

王は之に従ひ、始めて太學を立てる。

漢 〔劉聰は愍帝を使役し、晉臣は涕泣す〕 漢主の聰は出でて畋し、愍帝を以て車騎將軍を行ひ、戎服して戟を執りて前導せしむ。見る者は之を指して曰く、

「此れ故の長安の天子也。」

聚まり而して之を觀、故老の泣く者有り。太子の粲は聰に言ひて曰く、

「昔周の武王は豈に紂を殺すを樂しまん乎？正に同惡相ひ求めて、患と為るを恐るる故也。今兵を興し衆を聚める者は、皆な子業（愍帝の字）を以て名と為す、早く之を除くに如かず！」

聰は曰く、

「吾は前に庾珌（^{しほら}）（続は庾珌、88卷建興元年）の輩を殺し、而して民心は猶ほ是くの如し。吾は未だ復た殺すを忍びざる也、且く小しく之を觀ん。」

十二月、聰は群臣を光極殿に饗し、愍帝をして酒を行ひ爵を洗ひ使め、已に而して衣を更（^か）え、又た之をして蓋を執ら使む。晉臣は多く涕泣し、聲を失う者有り。尚書郎の隴西の辛賓は起ち、帝を抱きて大いに哭き、聰は命じて引いて出し、之を斬らしむ。

■〔趙固・郭默の侵入に劉粲は愍帝殺害〕 趙固は河内太守の郭默と漢の河東を侵し、絳（平陽郡の県、山西省

河東道絳県、現・運城市絳県）に至り、右司隸（司隸を左右に分ける）部の民の之に奔る者は三萬餘人。騎兵將軍の劉勳は追いて之を撃ち、萬餘人を殺し、固、默は引いて歸る。太子の粲は將軍の劉雅生等歩騎十萬を帥いて小平津に屯し、固は揚言して曰く、

「要^{かなら}ず當に劉粲を生縛って以て天子に贖うべし。」

粲は聰に表して曰く、

「子業が若し死せば、民は望む所無し、則ち李矩、趙固之用を為さず、攻めず而して自ら滅びん矣。」
戊戌（20日）、愍帝は平陽に於いて害に遇う（年18）。粲は雅生を遣わして洛陽を攻め、固は陽城山（河南の陽城県、河南省河洛道登封県、現・鄭州市登封市）に奔る。

■【**晉王の農業振興**】是の歲、王は命じて農功を課督せしめ、二千石、長吏は穀を入れるの多少を以て殿最（優れた功績）と為し、諸軍は各々自ら佃作し、即ち以て稟（稟給）と為す。

氏【**楊難敵は立つ**】氏王の楊茂搜は卒し、長子の難敵は立ち、少子の堅頭と分けて部曲を領す。難敵は左賢王と號し、下辨（武都郡、甘肅省渭川道成県の西、現・隴南市成県）に屯し、堅頭は右賢王と號して、河池（武都郡、甘肅省渭川道徽県、現・隴南市徽県）に屯す。

吐谷渾【**慕容廆の庶兄吐谷渾の西遷**】河南王の吐谷渾（最初は人名だが、後に部族名となる。鮮卑族の支配者だが、青海東周辺に居す）は卒す。吐谷渾なる者は、慕容廆之庶兄也、父の涉歸は、戸一千七百を分けて以て之に隸す。廆の位を嗣ぐに及び、二部の馬は鬥い、(5-299p) 廆は遣使して吐谷渾を讓めて曰く、

「先公は分け建てて別有り、奈何して相い遠異（遠く去りて以て相別異する）せず、而して馬をして斗傷有ら令むるや」

吐谷渾は怒りて曰く、

「馬は是れ六畜（馬牛羊犬豚鶏）なり、斗うは乃ち其の常なり、何ぞ怒りて人に及ぶに至るや！遠く別れんと欲するは甚だ易し、恐らくは後に會うは難しと為す耳！今は當に汝の萬里之外に去るべし。」

遂に其の衆を帥いて西に徙る。廆は之を悔い、其の長史の乙那婁馮（乙那婁が姓）を遣わして追いて之を謝す。

吐谷渾は曰く、

「先公は嘗て卜筮之言と稱して云う、『吾が二子は皆な當に強盛なり、祚は後世に流れん。』我は、孽子（^{けつし}妾腹の子）也、理は並びに大なるは無し。今馬に因り而して別れるは、殆んど天意なる乎！」

遂に復た還らず、西して陰山に傳き而して居す。永嘉之亂に屬なりて、因りて隴を度り而して西し、洮水（巴爾西河、甘肅省臨潭縣西北西傾山を水源、東に岷縣に入り。又北に臨潭縣を経て東に狄道縣に入る。西北に流れて洮沙導河と為り二縣之界、黄河に注ぐ）之西に據り、白蘭（山の名、青海の西南にあり、羌の地）を極め、地は方數千里。鮮卑は兄を謂って阿干（滿州語での兄の意味と同発音）と為し、廆は之を追思し、之が為に《阿干之歌》を作る。吐谷渾は子六十人有り、長子の吐延は嗣ぐ。吐延は長大にして勇力有り、羌、胡は皆な之を畏れる。

中宗元皇帝上太興元年（戊寅，318年）

段氏【**段末杯は涉復辰の一族与党を併せ、段匹磾を撃退**】春，正月，遼西公の疾陸眷は卒し、其の子は幼く、叔父の涉復辰は自ら立つ。段匹磾は薊より往きて喪に奔る。段末杯は宣言す、

「匹磾之來たるは、篡（篡奪）を為さんと欲す也。」

匹磾は右北平に至り、涉復辰は兵を發して之を拒む。末杯は虚に乗りて涉復辰を襲い、之を殺し、其の子弟黨與（党与）を併せて、自ら單于と稱し、匹磾を迎撃して、之を敗る。匹磾は走りて薊に還る。

【司馬睿は遂に東晋皇帝として即位】

■ 「愍帝の凶問にも晉王は尊号を立てず」 三月，癸丑（7日），愍帝の凶問（凶聞）は建康に至り，王は斬綰^{ざんさい}（最重要の喪服）廬（寄廬、喪中の家）に居る。百官は尊號を^{たてまつ}上らんを請い，王は許さず。紀瞻は曰く、「晉氏の統の絶えること，今に於いて二年なり，陛下は當に大業を承けるべし。宗室を顧望するに，誰か復た與に譲らん！若し大位を光踐すれば，則ち神、民は憑依（霊などが乗り移る）する所有り。苟くも天の時に逆い，人事に違うを為せば，大勢は一たび去りては，復た還る可からず。今兩都は燔蕩し，宗廟は主無く，劉聰は號を西北に竊む^{ぬす}，而るに陛下は方に高く東南に譲れば，此れ謂う所の揖讓^{ゆうじょう}（拱手してへりくだる）し而して火を救う也。」

王は猶ほ許さず，殿中將軍の韓續をして御坐を徹去せ使む。瞻は續を叱して曰く、「帝の坐は上は列星に應ず，敢えて動かす者は斬らん！」

王は之が為に容を改める。

■ 「周嵩の上疏」 奉朝請（朝会の請召を奉ずる役）の周嵩（王が宰相の時の參軍）は上疏して曰く、

「古之王者は，義全くし而る後に取り，譲り成り而して後に得，是を以て世を享けること長く久しく，光を重ねること萬載也。今梓宮（梓の木で作った君主の棺）は未だ返さず，舊京は未だ清まらず，義夫は血に泣き，士女は遑遑とす。宜しく嘉謀を開延し，卒を訓え兵を厲ぎ^{おし}，先ず社稷の大恥を雪ぎ，四海之心に副うべし，則ち神器は將に安くに適かん哉！」

是に由りて旨に^{さから}忤い，（5-300p）出でて新安（孫權は丹陽を分けて新都郡を置き武帝は太康元年に新安郡を置く。浙江省金華道淳安県の西、現・杭州市淳安县）太守と為り，又た怨望するに坐して罪に^{いた}抵る。嵩は，顗之弟也。

■ 「司馬睿は皇帝に即位す」 丙辰（10日），王は皇帝に即位し，百官は皆な陪列す。帝は王導に命じて御床に升りて共に坐さしむ，導は固く辭して曰く、

「若し太陽が下の萬物と同じすれば，蒼生（人民）は何に由りてか仰ぎ照らされんや？」

帝は乃ち止む。大赦し，改元し，文武に位二等を増す。帝は諸吏の刺（名刺）を投じて勸進する者に賜いて位一等を加え，民の刺を投じる者は皆な吏に除せんと欲し，凡そ二十餘萬人なり。散騎常侍の熊遠^{ゆうえん}は曰く、

「陛下は天に應じて統を繼ぎ，率土（陸地の続くかぎり。国の果て）歸戴す，豈に近き者のみ獨り情重く，遠き者は情輕きや！漢法（漢の恵帝は位を継いで民に爵一級を賜り、官秩ある物には歳数で差をつける。その後即位して率ね民に爵一級を賜る）に依りて^{あまね}遍く天下に爵を賜うに若かず，恩に於いて普（遍）と為し，且つ以て檢核（調査）之煩わしきを息め，巧偽之端を塞ぐ可き也。」

帝は従わず。

■ 「太子紹と庾亮・溫嶠は布衣之交」 庚午（24日），王太子の紹を立てて皇太子と為す。太子は仁孝にして，文辭を喜び，武藝を善くし，賢を好み士に禮し，規諫（正し諫める）を容受し，庾亮、溫嶠等と布衣之交わりを為す。亮は風格峻整にして，善く老、莊を談り，帝は之を器重しとし，亮の妹を聘して太子の妃と為す。帝は賀循を以て太子の太傅を行わしめ，周顗を少傅と為し，庾亮をして中書郎を以て東宮に侍講せしむ。帝は刑名家（法家）を好み，《韓非》の書を以て太子に賜わる。庾亮は諫めて曰く、

「申、韓（申不害と韓非は刑名家の代表的人物）は刻薄にして化を傷つける，聖心を留めるに足らず。」

太子は之を納れる。

■▲[慕容廆は裴嶷に軍国を委ね、中原制覇を目指す] 帝は復た遣使して慕容廆に龍驤將軍、大單于、昌黎公を授けしめ、廆は公爵を辭して受けず（実は昌黎公では不満）。廆は游逵^{ゆうすい}を以て龍驤長史と為し、劉翔を主簿と為し、逵に命じて府朝の儀法を創定せしむ。裴嶷は廆に言つて曰く、

「晉室は衰微し、江表に介居し、威徳は遠く及ぶ能わず、中原之亂は、明公に非ざれば拯う能わざる也。今諸部は各々兵を擁すと雖も、然るに皆な頑愚相い聚まり、宜しく漸^{ぜん}を以て并せ取り、以て西討之資（遼東より兵を西に進めて中原を取る）と為すべし。」

廆は曰く、

「君の言は大なり、孤が及ぶ所に非ざる也。然るに君は中朝の名徳にして、孤が僻陋^{へきろう}（都を遠く離れた僻地）を以てせず而して之を教誨（教え諭す）す、是れ天は君を以て孤に賜い而して其の國を祐ける也。」

乃ち嶷を以て長史と為し、委ねるに軍國之謀を以てす。諸部の弱小なる者は、稍稍撃ちて之を取る。

■[李矩と劉粲の黄河の攻防戦] 李矩は郭默、郭誦をして趙固を救わしめ、洛汭^{らくじ}（水曲流れるを汭、洛水の黄河流入口、河南省河洛道鞏県、現・鄭州市鞏義市）に屯す。誦は潜かに其の將の耿稚等を遣わして夜河を濟り漢の營（粲は孟津の北岸に屯す）を襲わしめ、漢の貝丘王の翼光^{うかが}は覘いて之を知り、以て太子の粲に告げ、之に備えを為すを請う。粲は曰く、

「彼は趙固之敗れるを聞き、自ら保ちて暇あらず、安んぞ敢えて此に來たらん邪！將士を驚動するを為す母^なかれ！」

俄に而して稚等は奄至し、十道より進攻す。（5-301p）粲の衆は驚き潰え、死傷は太半なり。粲は走りて陽郷（河南省河北道獲嘉県、現・新郷市獲嘉県）を保つ。稚等は其の營に據り、器械、軍資を獲ること勝げて數う可からず。旦に及びて、粲は稚等の兵少なきを見て、更に劉雅生と餘の衆を收めて之を攻め、漢主の聰は太尉の范隆をして騎を帥いて之を助けしめ、稚等と相い持ち、苦戦すること二十餘日、下す能わず。李矩は兵を進めて之を救い、漢兵は河に臨みて拒み守り、矩の兵は濟るを得ず。稚等は其の獲る所の牛馬を殺し、其の軍資を焚き、圍みを突き、虎牢（開封道汜水県、現・鄭州市滎陽市汜水鎮）に奔る。詔して矩を以て都督河南三郡（河南・滎陽・弘農）諸軍事とす。

漢^{しゅうし}漢の蠡斯（キリギリス）則百堂に災あり、漢主の聰之子の會稽王の康等二十一人を燒殺す。

漢聰は其の子の濟南王の驥^きを以て大將軍、都督中外諸軍事と為し、尚書を錄さしめ、齊王の勣^{まい}を大司徒と為す。

前涼[陳安拳兵、張寔は保に付かず晉王に称藩、年号用いず] 焦嵩、陳安は兵を擧げて上邽に逼る、相國の保は遣使して急を張寔に告げ、寔は金城太守の竇濤^{とうとう}を遣わして歩騎二萬を督して之に赴かしむ。軍は新陽（天水郡の県、甘肅省渭川道秦安県の西南、現・天水市秦安県）に至り、愍帝の崩ずるを聞き、保は尊號を稱せんと謀る。破羌都尉の張誥は寔に言つて曰く、

「南陽王は、國之疏屬（保は宣帝の從曾孫故に疏屬）なり、其の大恥（君父が皆賊の手に死すは保の大恥）を忘れて而して亟かに自ら尊くなると欲す、必ず成功する能わず。晉王は近親（帝は宣帝の曾孫故に近親）にして、且つ名徳有り、當に天下を帥いて以て之に奉ずべし。」

寔は之に従い、牙門の蔡忠を遣わして表を奉じて建康に詣らしむ。至るに比^{およ}びて、帝は已に即位す。寔は江東の年號を用いず、猶ほ建興を稱す。（河西の張氏政権は建興年号を九世 49 年使用、孝宗の升平五年に張天賜が使用）

■夏、四月、丁丑（1日）朔、日食之れ有り。

■王敦に江州牧、王導に驃騎大將軍、開府儀同三司を加える。導は八部の從事を遣わして揚州の郡國^{めぐ}を行

らしめ、還り、同時に俱に見る。諸従事は各々二千石（主に郡太守などの高官が該当の漢における官僚の等級と俸給）官長の得失を言う、獨り**顧和**は言無し。**導**は之に問う、**和**は曰く、

「明公は輔を作し、寧んぞ網をして吞舟（の様な大魚）を漏ら使め、何に縁りてか風聞を採り聴き、察察を以て政を為さん邪！」

導は咨嗟（嘆息）して善しと稱す。**和**は、**榮**之族子也。

大成成の丞相の**范長生**は卒す。成主の**雄**は**長生**の子の侍中の**賁**を以て丞相と為す。**長生**は博學にして、藝能多く、年は百歳に近く、蜀人は之を奉ずること神の如し。

漢〔**劉聰の後宮の乱れ**〕漢の中常侍の**王沈**の養女は美色有り、漢主の**聰**は立てて以て**左皇后**とす。尚書令の**王鑒**、中書監の**崔懿之**、中書令の**曹恂**は諫めて曰く、

「臣は聞く**王者**は**后**を立て、徳を乾坤（乾は父道で君徳、坤は母道は后徳）に比し、生きて宗廟を承け、没して后土に配す。必ず世徳（累世的功德）名宗、幽閒（深隔）令淑を擇び、乃ち四海之望みに副い、神祇之心に稱う。

（5-302p）**孝成帝**（32 卷漢の哀帝建平元年）は**趙飛燕**を以て**后**と為し、繼嗣をして絶滅し、社稷をして墟と為さ使めるは、此れ前鑒（続は鑑）也。**麟嘉**（愍帝の建興四年は漢の麟嘉元年）より以來、中宮之位は、徳を以て擧げず。借に**沈**之弟の女なら使むるも、刑餘（前科者）の小丑（続は小醜、道化者）にして、猶ほ以て椒房（皇后の御所）を塵汚（埃塗れ）す可からず、況んや其の家の婢を邪！六宮の妃嬪は、皆な公子公孫なり、奈何して一旦婢を以て之の主とするや！臣は國家之福に非ざるを恐れる也。」

聰は大いに怒り、中常侍の**宣懷**をして太子の**粲**に謂って曰わ使む、

「**鑒**等の小子は、狂言侮慢し、復た君臣上下之禮無し、其れ速かに考實せよ！」

是に於いて**鑒**等を収めて市に送り、皆な之を斬る。金紫光祿大夫の**王延**は馳せて將に入りて諫めんとし、門者は通さず。**鑒**等は刑に臨むや、**王沈**は杖を以て之を叩いて曰く、

「庸奴（つまらぬ人間、雇われ人）、復た能く惡を為す乎！乃ち公は何ぞ汝の事に與らんや！」

鑒は瞋目して之を叱して曰く、

「豎子や、大漢を滅ぼす者は、正に汝鼠輩と**斬准**に坐する耳！要らず當に汝を**先帝**に訴え、汝を地下に取りて之を治めん。」

准は**鑒**に謂って曰く、

「吾は詔を受けて君を収める、何の不善有りて、君は漢の滅びるは吾に由らんとする也！」

鑒は曰く、

「汝は皇太弟を殺し、主上をして不友之名を獲使む。國家は汝が輩を畜養す、何ぞ滅びざるを得ん！」

懿之は**准**に謂って曰く、

「汝の心は梟獍（梟は母を食い破る鳥、獍は父を食い破る獸）の如し、必ず國の患いを為さん、汝は既に人を食い、人も亦た當に汝を食わん。」

漢**聰**は又た**宣懷**の養女を立てて**中皇后**と為す。

■司徒の**荀組**は許昌に在り、**石勒**に逼られ、其の屬數百人を帥いて江を渡る。**組**に詔して太保西陽王の**叅**と並びて尚書事を録せしむ。

段氏〔**段匹磾は段末杯に謀られ、同盟する劉琨を殺害**〕**段匹磾**之疾**陸眷**の喪に奔る也、**劉琨**は其の世子の**群**をして之を送ら使む。**匹磾**は敗れ、**群**は**段末杯**の得る所と為る。**末杯**は厚く之を禮し、**琨**を以て幽州刺史と為すを許し、之と與に**匹磾**を襲わんと欲し、密かに遣使して**群**の書を繼し、**琨**に内應を為さんと

請わしむ。匹磾の邏騎の得る所と為る。時に琨は別に征北（征北將軍の治所）の小城に屯し、知らざる也。來たりて匹磾を見る。匹磾は群の書を以て琨に示して曰く、

「意^{こころ}は亦た公を疑わず、是を以て公に白す耳。」

琨は曰く、

「公と同盟し、國家之恥を雪がんと庶う。若し兒の書密かに達すとも、亦た終に一子之故を以て公に負^{そむ}きて而して義を忘れざる也。」

匹磾は雅^{もと}より琨を重んじ、初め琨を害するの意無く、將に屯に還るを聽さんとする。其の弟の叔軍は匹磾に謂って曰く、

「我は、胡夷耳。能く晉人の服する所以の者は、吾が衆を畏れる也。今我が骨肉は乖離（段末杯との争い）し、是れ其の良圖之日なり。若し琨を奉じて以て起こる有れば、吾が族は盡きん矣。」

匹磾は攻めて之を抜く。代郡太守の辟閭嵩、後將軍の韓據は復た潜かに匹磾を襲わんと謀り、事は洩れ、匹磾は嵩、據及び其の徒黨を執り、悉く之を誅す。五月，癸丑（8日），匹磾は詔と稱して琨を收め、(5-303p) 縊りて之を殺し、並せて其の子侄四人を殺す。琨の從事中郎の盧謐、崔悅等は琨の餘衆を帥いて遼西に奔り、段末杯に依り、劉群を奉じて主と為す。將佐は多く石勒に奔る。悅は、林之曾孫也。朝廷は匹磾が尚ほ強きを以て、其の能く河朔を平らげるを冀い、乃ち琨の為に哀を擧げず。溫嶠は表す、

「琨は帝室に忠を盡くし、家は破れ身は亡びる、宜しく褒恤（褒獎抚恤、褒め憐れむ）に在るべし。」

盧謐、崔悅は末杯の使者に因りて、亦た上表して琨の為に冤（罪）を訟える。後數歳にして、乃ち琨に太尉、侍中を贈り、謚して愍と曰う。是に於いて夷、晉は琨が死せる故を以て、皆な匹磾に附かず。末杯は其の弟を遣わして匹磾を攻め、匹磾は其の衆數千を帥いて將に邵續（字嗣祖、魏郡安陽人）に奔らんとし、勒の將の石越は之を鹽山（渤海の高城県、直隸省津海道鹽山県、現・沧州市塩山県）に邀え、大いに之を敗り、匹磾は復た還りて薊を保つ。末杯は自ら幽州刺史と稱す。

■ 〔溫嶠は劉琨の為に返命を求める〕 初め、溫嶠は劉琨の為に表を奉じて建康に詣り、其の母の崔氏は固く之を止め、嶠は裾を絶ちて而して去る。既に至り、屢々返命を求め、朝廷は許さず、會々琨死して、散騎侍郎に除せられる。嶠は母の亡するを聞き、亂に阻まれて喪に奔り、葬に臨むを得ず。固く譲りて拜せず、苦^{ねんご}ろに北に歸るを請う。詔して曰く、

「凡そ禮を行う者は、當に理をして經（常）通す可から使むべし。今桀逆（凶暴忤逆）は未だ梟せられず、諸軍は梓宮を奉迎して猶ほ未だ進むを得ず、嶠は一身を以て、何に於いてか其の私難^{すく}を濟い而して命に従わざる邪！」

嶠は已むを得ず拜を受ける。

■ 〔曹嶷は漢に反し、東晉に降り、石勒に付く〕 初め、曹嶷は既に青州に據り、乃ち漢に叛して來降す。又た建康の懸遠にして、勢援接せざるを以て、復た石勒と相い結ぶ、勒は嶷に東州大將軍、青州牧を授け、琅邪公に封じる。

■ 〔刁協の刻碎の政治と放肆〕 六月，甲申（9日），刁協を以て尚書令と為し、荀崧を左僕射と為す。協の性は剛悍にして、物と多く忤^{さから}い（從順でない）、侍中の劉隗と俱に帝の寵任する所と為る。時弊を矯げんと欲し、毎に上を崇び下を抑え、豪強を排沮し、故に王氏の疾む所と為る、諸々の刻碎（苛刻煩碎）之政は、皆な隗、協の建てる所と雲う。協は又た酒を使い放肆（氣儘でだらしない）にして、公卿を侵毀（侵害毀壞）し、見る者は皆な目を側だてて之を憚る。

■ 戊戌（23日）、皇子の晞を封じて武陵王と為す。

匈奴 **〔拓跋鬱律は北方の雄たり〕** 劉虎は朔方（87 卷懷帝永嘉四年）より拓跋鬱律の西部を侵す。秋，七月，鬱律は虎を撃ち、大いに之を破る。虎は走りて塞を出で、從弟の路孤は其の部落を帥いて鬱律に降る。是に於いて鬱律は西に烏孫の故地を取り、東に勿吉（通古斯族、松花江畔による部族）以西を兼ね、土馬は精強にして、北方の雄たり。

【劉聰没後の大混乱、劉曜皇帝即位】

漢 **〔劉聰卒して皇后四人、桀は即位して無礼〕** 漢主の聰は疾に寝ね、大司馬の曜を征して丞相と為し、石勒を大將軍と為し、皆な尚書事を録し、詔を受けて輔政せしむ。曜、勒は固く辭す。乃ち曜を以て丞相と為し、雍州牧を領せしめ、勒を大將軍と為し、幽、冀二州の牧を領せしむ、勒は辭して受けず。上洛王の景を以て太宰と為し、(5-304p) 濟南王の驥を大司馬と為し、昌國公の顗を太師と為し、朱紀を太傅と為し、呼延晏を太保と為し、並せて尚書事を録せしむ。范隆を守尚書令、儀同三司とし、靳准を大司空と為し、司隸校尉を領せしめ、皆な送^{たが}いに尚書の奏事を決せしむ。癸亥（19日）、聰は卒す。甲子（20日）、太子の桀は即位す。皇后の靳氏を尊びて皇太后と為し、樊氏を弘道皇后と號し、武氏を弘德皇后と號し、王氏を弘孝皇后と號す。其の妻の靳氏を立てて皇后と為し、子の元公を太子と為す。大赦し、改元して漢昌とす。聰を宣光陵に葬し、諡して昭武皇帝と曰い、廟號を烈宗とする。靳太后等は皆な年は未だ二十に盈たず、桀は多く無禮を行い、復た哀戚（人の死を悲しみ悼む）する無し。

漢 **〔劉桀の軍事は靳准が決す〕** 靳准は陰かに異志有り、私に桀に謂って曰く、

「聞くが如く諸公は伊、霍之事を行い、先ず太保及び臣を誅し、大司馬を以て萬機を統べしめんと欲す、陛下は宜しく早に之を圖るべし！」

桀は従わず。准は懼れ、復た二靳氏（聰の皇后と桀の皇后）をして之を言わしめ、桀は乃ち之に従う。其の太宰の景、大司馬の驥、驥の母の弟の車騎大將軍の吳王の逞、太師の顗、大司徒の齊王の勳を收め、皆な之を殺す。朱紀、范隆は長安（劉曜に奔る也）に奔る。八月，桀は兵を上林（上林苑を平陽に起こす）に治め、石勒を討たんと謀る。丞相の曜を以て相國と為し、中外諸軍事を都督せしめ、仍って長安に鎮す。靳准を大將軍と為し、尚書事を録せしむ。桀は常に後宮にて游宴す。軍國之事は、一に准が決す。准は詔を矯め從弟の明を以て車騎將軍と為し、康を衛將軍と為す。

漢 **〔靳准は劉桀を殺して東晋に梓宮を送る〕** 准は將に亂を作さんとし、王延に謀る。延は従わず、馳せて、將に之を（桀に）告げんとす。靳康に遇い、延を劫^{おびやか}して以て歸る。准は遂に兵を勒して光極殿に上り、甲士をして桀を執ら^せしめ、數め而して之を殺し、諡して隱帝と曰う。劉氏の男女は、少長と無く皆な東市に斬る。永光、宣光の二陵を發^{あば}き、聰の屍を斬り、其の宗廟を焚く。准は自ら大將軍、漢の天王（晉書載記には漢大王）を號し、制を稱し、百官を置き、安定の胡嵩に謂って曰く、

「古より胡人の天子と為る者無し、今傳國の璽（洛陽が陥ち平陽に遷る）を以て汝に付す、還りて晉家に如け。」

嵩は敢えて受けず。准は怒り、之を殺す。遣使して司州刺史の李矩に告げて曰く、

「劉淵は、屠各の小丑（醜）なり、晉之亂れるに因る。矯^{いつわ}りて天命を稱し、二帝をして幽没せしむ。輒ち衆を帥いて梓宮を扶持す、請う以て上聞せよ。」

矩は馳せて帝に表し、帝は太常の韓胤等を遣わして梓宮を奉迎す。漢の尚書の北宮純（漢に降るは87 卷懷帝永嘉五年）等は晉人を招集し、東宮に堡し、靳康は攻めて之を滅ぼす。准は王延を以て左光祿大夫と為さんと欲すも、延は罵^{ののし}りて曰く、

「屠各の逆奴、何ぞ速かに我を殺さざるや！吾が左目を以て西陽門に置け、相國（劉曜が西から攻めるの意味）

之入るを觀ん也。右目を建春門に置け、大將軍（石勒が東から攻める）之入るを觀ん也！」

准は之を殺す。

漢 **[石勒は靳准を討ち、劉曜は皇帝即位、石勒は趙王]** 相國の曜は亂を聞き、長安より之に赴く。石勒は精銳五萬を帥いて以て准を討ち、襄陵（平陽郡の県、山西省河東道襄陵県、現・臨汾市襄汾県）の北原に據る。准は數々挑戦し、勒は壁を堅くして以て之を挫く。**冬、十月、曜**（字は永明、淵の族子）は赤壁（山西省河東道安澤県の南、現・臨汾市安沢県）に至る。太保の呼延晏等は平陽より之に歸し、**(5-305p)** 太傅の朱紀等と共に尊號を上る。曜（字は永明、淵の族子）は皇帝に即位し、大赦し、惟だ靳准の一門は赦の例に在らず。改元して光初とする。朱紀を以て司徒を領せしめ、呼延晏をして司空を領せしめ、太尉の范隆以下は悉く本位を復す。石勒を以て大司馬、大將軍と為し、九錫を加え、十郡を増封し、爵を進めて趙公と為す。

漢 勒は進みて准を平陽を攻め、巴（巴氏、魏の武帝が漢中より關中に遷し、河東・平陽にあり）及び羌、羯の降る者は十餘萬落なり、勒は皆な之を所部の郡縣に従す。漢主の曜は征北將軍の劉雅、鎮北將軍の劉策をして汾陰（県、山西省河東道榮河県の北、現・運城市万榮県南西部）に屯せ使め、勒と共に准を討つ。

■ **十一月**，乙卯（13日），日は夜出で，高さは三丈。

■ 詔して王敦を以て荊州牧と為し，陶侃に都督交州諸軍事を加える。敦は固く州牧を辭し，乃ち刺史と為るを聽す。

■ **[東晋の熊遠は上疏]** 庚申（18日），詔して群公卿士に各々得失を陳べしむ。御史中丞の熊遠は上疏し，以て為す、

「胡賊は夏を猾り^{みだ}，梓宮は未だ返さず，而して軍を遣わして進み討つ能わず，一の失也。群官は仇賊未だ報ぜざるを以て恥と為さず，務めは調戲、酒食に在り而して已むは，二の失也。官を選び人をを用い，實徳を料らず，惟だ白望に在り，才幹を求めず，惟だ請托を事とし，官に當たる者は事を治めるを以て俗吏と為し，法を奉じるを苛刻と為し，禮を盡くすを諂諛（阿諛）と為し，從容を高妙と為し，放蕩を達士と為し，驕蹇を簡雅と為すは，三の失也。世之惡む所の者は，泥滓に陸沈（水無くして沈む）し，時之善しとする所の者は，雲霄^{うんしやう}（雲のある空）に翱翔^{こうしやう}（旋回滑空）す。是を以て萬機は未だ整わず，風俗は偽薄なり。朝廷の群司は，從順を以て善と為し，相い違ふは貶せ見る^ら，安んぞ朝に辨爭之臣有り，士に祿仕之志無きを得る乎！古之士を取るは，敷き奏める^{すす}に言を以てす（各々治體の言を述べ進む）。今光祿は試みず（秀才・孝廉を試みずして官吏に署す），甚だ古義に違ふ。又た賢を擧げるに世族を出でず，法を用いるに權貴（権力者貴人）に及ばず，是を以て才は務めを濟さず，奸（続は姦）は懲りる所無し。若し此の道が改まざれば，以て亂を救うを求めるは，難し矣！」

■ **[東晋の人材登用制度刷新]** 是より先，帝は離亂之際を以て，人心を慰め悦ばさんと欲して，州郡の（推薦する）秀、孝なるに至る者は，試さず，普く皆な吏に署す。尚書の陳頴^{ちんぎん}も亦た上言す、

「宜しく漸く舊制に循い，試みるに經策を以てすべし。」

帝は之に従い，仍って詔す、

「科に中たらざる者は，（之を擧げたる）刺史、太守は官を免ぜん。」

是に於いて秀、孝は皆な敢えて行かず，其の到る有る者も，亦た皆な疾いに托し，三年に比ぶ^{およ}まで試に就く者無し。帝は特に孝廉の已に到る者を官に除せんと欲し，尚書郎の孔坦は奏議して，以て為す、

「近郡は君父（刺史・太守）を累^{わづら}わさんことを懼れて，皆な敢えて行かず。遠郡（続は遠近、晋書孔愉傳には遠州の邊郡）は試みられざるを冀^{こいねが}い，冒昧して來たり赴く。今若し偏く除署を加えれば，是れ身を謹み法を奉

ずる者は分を失い、(5-306p) 僥倖して投射（機に投じて利を射る）する者は官を得ると為す、顔風傷教は、恐らく此より始まらん。若かず一切罷め歸し、而して之が為に延期し、就學するを得使めんには、則ち法均しく而して令信ならん矣。」

帝は之に従い、孝廉に申べて（延期）七年に至り乃ち試するを聽す。坦は、愉之從子也。

漢 **〔斬准は沈吟して降らず、側近が殺し、石勒は攻める〕** 斬准は侍中の卜泰をして乗輿、服御を送ら使め、石勒に和を請い、勒は泰を囚えて、漢主の曜に送る。曜は泰に謂って曰く、

「先帝は末年、實に大倫を亂る（祭が其の諸母を蒸す事）。司空は伊、霍之權を行い、朕をして此に及ば使め、其の功は大なり矣。若し早く大駕を迎える者、當に悉く政事を以て相い委ねん、況んや死を免かるるを乎！卿は朕の為に入城し、眞に此の意を宣べよ。」

泰は平陽に還り、准は自ら曜の母兄を殺すを以て、沈吟（猶予躊躇）して未だ従わず。十二月、左、右車騎將軍の喬泰、王騰、衛將軍の靳康等は相い與に准を殺し、尚書令の靳明を推して主と為し、卜泰を遣わして傳國の六璽を奉じて漢に降る。石勒は大いに怒り、進軍して明を攻める；明は出でて戦い、大いに敗れ、乃ち城を嬰して固く守る。

■ **〔幼子の死に浪費する司馬睿〕** 丁丑（5日）、皇子の煥を封じて琅邪王と為す。煥は、鄭夫人之子なり、生まれて二年矣、帝は之を愛し、其の疾い篤きを以て、故に之を王とする。己卯（7日）、薨ず。帝は成人之禮を以て之を葬り、吉凶の儀服を備え、園陵を營起し、功費は甚だ廣し。琅邪國の右常侍（晉の王国には左右常侍を置く）の會稽の孫霄は上疏して諫めて曰く、

「古者凶荒には禮を殺ぐ（降し減ずる）、況んや今海内は喪亂し、憲章の舊制すら、猶ほ宜しく節省すべし。而るに禮典の無き所（前例無し）、顧って崇飾することは是くの如き乎！已に罷るる之民を竭くして、無益之事を營むは、已に困しむ之財を殫くして、無用之費を修む、此れ臣之安ぜざる所也。」

帝は従わず。

■ **〔彭城内史の周撫の反乱と石勒への投降〕** 彭城内史の周撫は沛國內史の周默を殺し、其の衆を以て石勒に降る。詔して下邳内史の劉遐に鼓城内史を領せしめ、徐州刺史の蔡豹、泰山太守の徐龕と共に之を討たしむ。豹は、質之玄孫也。

漢 **〔石虎に攻められた靳明は劉曜に投降、斬られる〕** 石虎は幽、冀之兵を帥いて石勒に會して平陽を攻め、靳明は屢々敗れ、遣使して救いを漢に求める。漢主の曜は劉雅、劉策をして之を迎え使め、明は平陽の士女萬五千人を帥いて漢に奔る。曜は西に粟邑（馮翊に属す県、陝西省關中道白水県の西北30里、現・渭南市白水県）に屯し、靳氏の男女を収め、少長と無く皆な之を斬る。曜は其の母の胡氏之喪を平陽に迎え、粟邑に葬し、號して陽陵と曰い、諡して宣明皇太后と曰う。石勒は平陽の宮室を焚き、裴憲、石會をして永光、宣光の二陵を修め使め、漢主の粲已下百餘口を収めて之を葬し、戍を置き而して歸る。

大成 **〔李鳳の乱平定し李壽登場〕** 成の梁州刺史の李鳳は數々功有り、成主の雄の兄の子の稚は晉壽（梓潼郡の県、四川省嘉陵道昭化県の東南50里、現・広元市元壩区）に在り、之を疾む。(5-307p) 鳳は巴西を以て叛し、雄は自ら涪に至り、太傅の驤をして鳳を討た使め、之を斬る。李壽を以て前將軍と為し、巴西の軍事を督せしむ。

令和3年5月18日 翻訳開始 9279文字

令和3年5月22日 翻訳終了 19070文字 現代地名・年表対応

令和3年11月20日 書下し終了 19580文字